

結・たより, Vol.12

発行:神戸 : ウイメンズ・シンクタンク・ユイ

1998.7.30. - 12p

請求記号:震災-6-z26

* 震災関連記事のみテキスト化しています

ユイ例会報告

宝塚NPOセンターが発足しました！

宝塚NPOセンター

事務局次長

山本 麗子さん

設立経緯

宝塚はもともとボランティア活動が盛んなところで、市社会福祉協議会（以下社協）のボランティアセンターが、安倉と阪急宝塚駅前ビルの2カ所にあります。社協のセンターですから、本来なら福祉関係が多いはずですが、約180ある団体・グループのうち、福祉関係は1／3ほど。環境、教育、まちづくりなどに取り組む団体・グループが多く、異分野のネットワークをつくろうという機運が盛り上がり、94年9月に、実行委員会形式による第1回ボランティアフェスティバルを開いて交流しました。

4カ月後の阪神・淡路大震災（95年1月）では、フェスティバルの経験がいき、ボランティアセンターが一定期間、コーディネート機能を果たしました。とはいえ、手話通訳グループが炊き出しに行くなど、必ずしも特技を生かした動きにならなかった場面があり、平時の活動を災害時にどう生かすか機能面での訓練が必要だと思います。

次の課題は、震災で活発化したボランティアをどう定着させるかということ。96年3月の第2回フェスティバルは、参加団体も内容もより充実。その翌年の9月ごろから第3回フェスティバルの実行委員会が動き始めましたが、準備を進める中で、文化、教育、環境などにかかわるグループや市域を越えた活動をしている人達から、「新しい拠点欲しい」との声があがりました。

ちょうど特定非営利活動促進法制定の動きで“NPO”が注目を集めていた時期です。市社協内にも「NPOのネットワークを進める会」という研究会ができ、内部検討が始まっていました。いろいろな意見がありましたが、98年1月の第3回フェスティバルで「NPOセンターをつくります」と公式に表明し、2月に設立準備委員会を発足、4月1日に開設しました。



センターの概要

現在「宝塚NPOセンター」は、阪急宝塚駅ビルの社協ボランティアセンターの一角に間借りしています。本来は、独立施設が理想ですが、まずは立ち上げ、需要に合わせて拡大していくつもりです。社協からは、森事務局長の人件費も出ています。

組織としては、言い出しっぺでもあるフェスティバル実行委員が発起人になり、その中の何人かは理事に就任しました。98年5月現在で、正会員100人、準会員34人、グループ団体会員が14団体、法人が4、団体、約165万円の寄付金が寄せられています。

私ともう1人のスタッフの人件費や備品類を含め、初年度は約1200万円の予算を組んでいます。阪神・淡路コミュニティ基金から2/3近くを助成してもらいましたが、あと半年で終わるので、その後、財源をどうしていくかが大きな課題です。

NPOの運営には、事業収入や寄付収入のバランスが求められますが、初年度に事業で収益を上げるのは至難の技です。とくにNPOセンターの場合、個々の団体の支援事業を行いながらなので大変です。宝塚NPOセンターの初年度の事業としては、設立記念講演をブックレットにまとめるぐらいでしょうか。収益事業をたちあげるのは、相当の経営感覚を持つスタッフがいて、十分なりサーチをしたうえでなければできません。



市民社会の担い手に

これまでの助成金をもらって活動する社会福祉系の団体は、自分たちで負担（会費）しながら組織を運営する形態に、戸惑いがあるようです。リーダーから「会員にどう説明すればいいのか」の相談もありますし、1万円の年会費（個人も団体も共通）を組織として負担するのは難しく、代表者が個人で入会しているケースもあります。社会システムのつくり変えに関与していく、そのために手を携えていく……という意識を、どう根付かせるかが課題ですね。

法人格を取るかどうかの問題は、より主体性や、経営に関する知識が問われます。短期の発想でなく、長期的視野をどう持つか。ベーシックな部分で一致していないと、仲良しグループだけではやっていけません。

また、NPOと女性の新しい働き方をどうからめていくのかも、大事な課題です。私自身「めふのお家」というデイサービスにかかわっていますが、管理された施設サービスに飽き足らず、人間らしいサービスをしたいと思っている女性が多いはず。「103万円の範囲内で働く」ことを、乗り越えていく自覚が持たれます。

NPOには、新たな社会システムを構築していくという役割があります。そして、NPOセンターの役割は、法人格のある団体とだけおつきあいしていればよいのではなく、市民社会の層があつくなるための活動全般だと思っています。全国でもたくさんの支援センターができていますが、民間が立ち上げたものが多いですね。行政や企業とパートナーシップを保ちながら、自主的に取り組む姿勢が大切だと思います。

(980524)

つくりましたデイサービスハウス「めふのお家」

山本 麗子

「震災関連記事でないため、内容は省略」

[新聞記事あり 省略]

《VAL21》

Vivid And lyric

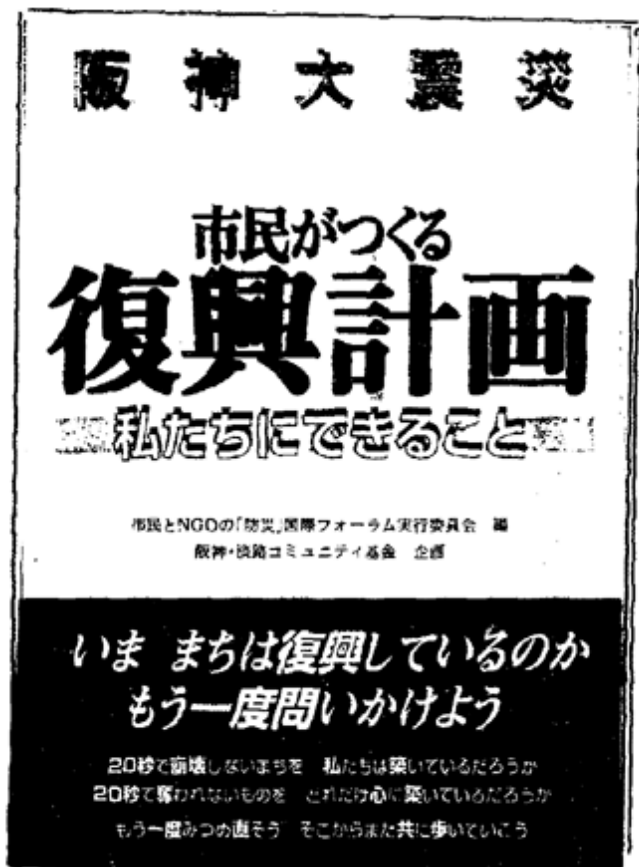
・・・生き生きと心豊かに・・・

「女性産業人懇話会の目指すもの」

陸田 昭子

「震災関連記事でないため、内容は省略」

BOOK



まえがきより——

「3年間の復興事業は、高速道路や港の岸壁を元どりにしたが、生活再建の視点から見れば、文化も福祉も経済も住宅も、大地震のまえに比べで落ち込んだままだ。政治家や官僚が考える復興と私たちが願う復興はどこか違うのではないか。大地震から4年目に入っても、地震災害は進行している。いま市民が求める復興の姿を描き出さなければならない」

震災後の復興の中で“鳥の目と虫の目”という言葉が使われた。政治家や官僚が考える復興がどちらかと言えば“鳥の目”であるのに対して、市民が考える復興は“虫の目”に近いと思う。その“虫の目”をたくさん集めて、この本は作られた。

震災の教訓として、地域コミュニティの大切さを基本におきながら、さまざまな角度から問題を提起する。完成された「計画ではないが、そこへ至るプロセスで必要とされる視点が各界の人から提案されている



住む家を失う、住む家がないことから生じるさまざまな問題を震災で、私たちはいやというほど味わった。資金のない弱者の住まいは今だ失われたままだ。

アメリカのサンフランシスコ、全米で一番住宅価格が高いこの町で非営利のディベロッパーを含むNGO（非営利団体）が公的資金と民間資金をたくみに組み合わせて、公共住宅やコミュニティ施設の開発等に取り組んでいる。特に興味ををひいたのはホームレスの人々への住宅政策。コミュニティの再生と貧困の克服を公共政策として考え、NGO活動が展開されている。

本 ビデオ

「震災関連記事でないため、内容は省略」

■街路樹から賑やかな蝉の声、庭先のひまわり、バーゲンセール、夏のさかりです。

「ユイ」のみなさん、暑さにめげずがんばっていらっしゃいますか？「結・たより」12号をお届けします。メンバーの方々の活動の広がりを「たより」を作りながら実感し、元気づけられています。（尼）

(c) 1998ウイメンズ・シンクタンク・ユイ (デジタル化：神戸大学附属図書館)